

文学と 言語学の インターフェイス

今回のテーマは、前回に引き続き『1984』に登場する表現である。本作には前回のテーマでもあった「ニュースピーク」の他にも、多くの魅力的な要素が存在する。その中でも、今回紹介するのは、「ダブルスピーク」である。本稿では、ダブルスピークを概説した後、それを言語学の観点から観ていく。

まず、ダブルスピークとは何か。それは、作中に登場する言語でも、用語でもなく、ある語を恣意的に本来の意味とは異なる意味で使用する修辭的手法のことである。『1984』作中においてこれを使いこなすには、前回紹介したニュースピーク——思考表現の為に必要な語彙を恣意的に削減し、民衆の思考統制を確実化するための言語——や、ある2つの相反する事実に対し、特定の条件下で信ずるものを切り替える思考姿勢である「二重思考」という技術が必要である。

前号でも紹介したように、『1984』とは全体主義的近未来国家のオセアニアを舞台にした、いわゆるディストピア小説である。その読者は、「イングソック党」と呼ばれる支配階級の管理下に置かれた人間の視点から、この世界の歪さに直面する。その中で、敵国を切り替えながら、常に戦争を続けるオセアニアという国の構造の一端を知っていく事となる。今回取り扱う「ダブルスピーク」は、前述のとおり、その名前こそ出ないものの、作中でも度々その姿を見せる。例えば、物語の冒頭で、主人公ウィンストン・スミス所属する党の建造物に、党のスローガンとして、以下の文が書かれている場面がある——

戦争は平和なり
自由は隷属なり
無知は力なり

これらは一見すると矛盾した文になっている。なぜならば、「戦争」と「平和」、「自由」と「隷属」、「無知」と「力」は反意語、もしくは反対の意味が連想される関係にあるからである。しかし、ダブルスピークという概念内では、これらは意味の通るものとして成立する。1文目の「戦争は平和なり」を例にすると、「戦争」と「平和」という反意語が並べられており、一見するとこれは矛盾している。しかし、「平和」を「良いこと」という意味で解釈した場合、この矛盾に対して逆説的な解釈が成り立つ。つまり、「戦争とは良いことだ」という解釈を導き出すことが可能になるのである。ここでは、「戦争のない状態」という「平和」の本来の意味から、「良いこと」という意味への変化が起きているといえる。一方、2文目の「自由は隷属なり」は、「戦争は平和なり」とは逆の意味変化が起きている。「自由」と「隷属」も同様に反意の関係にあるため、この文も文字どおりの意味では矛盾している。しかし、「隷属」を「悪いこと」として解釈することで、この概念が根付いている支配者層の人間にとっては、「自由とは悪いものだ」といった矛盾のない解釈が可能となる。

ここで、言語学の観点——特に語用論——に基づきこのダブルスピークを紐解いていく。カギとなるのは、イギリスの言語哲学者ポール・グライスの提唱した「協調の原理」だ。協調の原理とは、会話を成立させるために、話し手と聞き手が暗黙の了解として従っているとされる、情報に関する一般原理のことである。「量の公理」、「質の公理」、「関連性の公理」、「様式態の公理」の4つの公理体系から成り、ここでいう「公理」とは発話における指針のようなものである。「量の公理」とは、発話の長さや発話が含む情報量に関する公理であり、必要な情報を必要分だけ伝えることを求める指針である。次に、「質の公理」とは発話に対する発話者の態度に関する公理であり、発話者が真である、もしくは根拠があると思っていることのみ伝えることを求める指針である。「関連性の公理」は会話における発話の位置付けに関する公理であり、与える情報が会話の流れに関連するよう求める指針である。最後の「様式態の公理」は発話の表現方法に関する公理であり、与える情報が明確かつ簡潔に、そして適切な順序で伝達されることを求める指針である。



ダブルスピーク ～誘導の言葉～

矛盾の先にある 本当の意味とは

協調の原理がはたらく仕組みを、以下の例文で説明する。

A：この部屋、寒くない？
B：エアコンつける？

この会話では、話し手Aが発した「部屋が寒い」という発話に対し、話し手Bが暖房の起動を提案している。日常でもよく現れる会話であるが、今一度文章として読んでみると、若干の違和感が無いだろうか。Aは部屋が寒いかどうかを聞いたわけであるから、文字通りに解釈をするのならば、期待される回答はそれに対するイエスかノーの判断であるはずである。しかし、これに対してBは、エアコンの起動について尋ねる形で応じている。この会話が成立したものとして認識される背景には、「会話の推意」という語用論上の原理が関与している。

会話の推意とは、発話における文字通りの意味を超えた暗示や含意を指し、これまで述べてきた協調の原理における4つの公理が重要な要素となる。4つある公理のうちいずれかが機能することで、文字通りでは支離滅裂な表現も、意味の通る会話として成立する。上記のAの発話は、単なる寒さの確認では関連性の低い発話と解釈される。このため、関連性の公理を満たすために、エアコンの起動を求める発話であったと再解釈されることになるのである。

では、この協調の原理を手がかりに、前述の「戦争は平和なり」という文が「戦争はいいことだ」という意味を表すに至るまでのプロセスを考えていこう。上述のとおり、ここでは文字通りの意味では矛盾する表現がスローガンとして掲げられている。このままでは意味が取れない。しかし、関連性の公理に基づくと、関連性のないスローガンが掲げられるはずはないと推論される。すると、「平和」は字義通りの意味ではないはず。平和から連想される「いいこと」という意味を当てはめる。するとBig brotherの思想に合致した意味が導かれる。これにより、この文の意味決定が終了する。

ダブルスピークは、ことばの選択と協調の原理を利用することによって、受け手の意味解釈を発信者側の都合に合わせ歪めることを意図した手法である。限定的な語彙と脈略のない表現を利用し、人々に「だいたいこういうことだろう」と解釈させ、思考を望む方向へと誘導する。そういった不明瞭な言語の扱いこそが、ダブルスピークの本質なのである。

注目したいのは、このダブルスピークと前回紹介したニュースピークが相互に補完し合う点である。ニュースピークが語彙を制限し、話者の思考の幅を狭める一方、ダブルスピークは言葉の印象を操作し、受け手の解釈を誘導する。両者は手法こそ異なるが、最終的な目的は同じ——情報の意味を、歪められた形で受け手に受容させることである。作中、党はこの二つの技術を駆使して、人々の思考と判断を巧みに操っている。協調の原理を基にダブルスピークをみることで、言語がいかに情報を伝えるか、あるいはいかに情報を遮断し、発話者に都合のいい意味を作る事が可能であるかを知ることができる。

引用文献

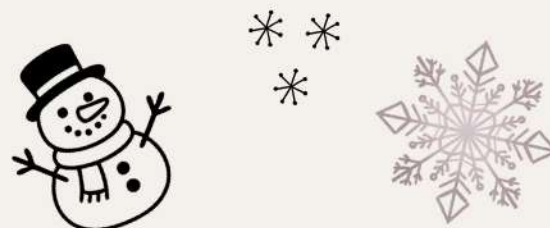
George Orwell (1949) 1984 Secker and Warburg (ジョージ・オーウェル 高橋和久(訳) (2009) 『一九八四年』[新訳版] 早川書房) 愛川大悟

CROSS WORD PUZZLE

タテのカギとヨコのカギから連想される英単語を以下のマスに当てはめて、太枠の中の単語を見つけ出そう。

タテのカギ

- I：雪を丸めて作った塊のこと。
雪合戦や雪だるまに使われることが多い。
- II：強い猛吹雪や霧で視界が失われている気象状況のこと。
今回のクロスワードの答えの別称。
- III：「偽の／誤った」を英語で。
- IV：クリスマスにサンタクロースのそりを引く動物として語り継がれていることで有名な動物。



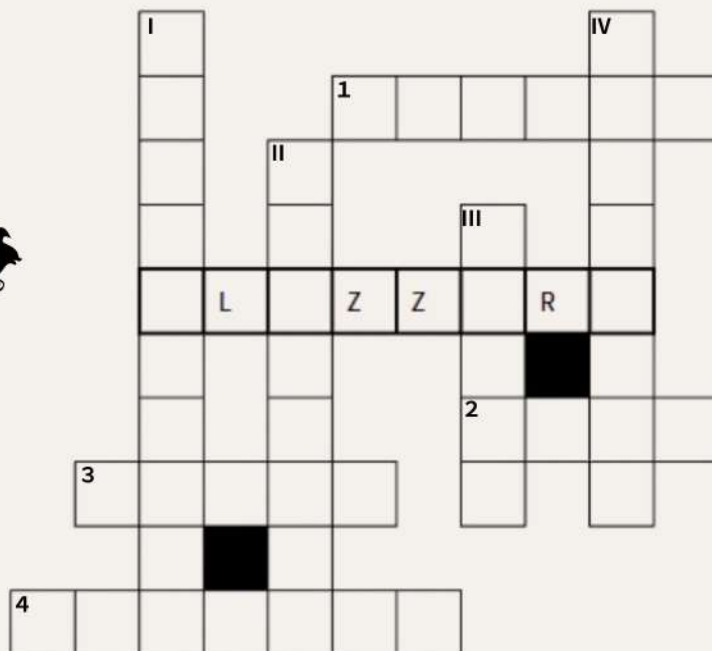
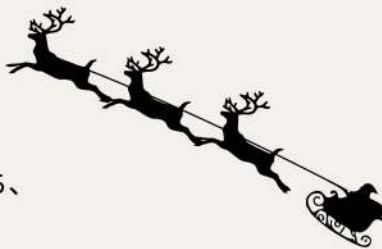
作成者から一言

The LinguistICをお手に取っていただいた方々、あけましておめでとうございます。そして、ご閲覧ありがとうございます。

今回のクロスワードは「冬」に関連しているものを多めに入れてみました。今年の冬はとても寒く、体を壊しやすいそうです。皆さんも体調には気をつけてくださいね。

ヨコのカギ

- 1：スティックを使ってボールを打ち、相手のゴールに入れるスポーツ。
- 2：特に冬によく食べられる煮込み料理。
「煮込む」という意味もある。
- 3：2つ以上の金属を合わせて作られた金属のこと。
- 4：冬によく着られているウールや綿などで編まれた衣類。
日本語では「セーター」と呼ばれている。



形態論特集 #1

なぜ「まつりつくば」は少し変なのか



毎年 8 月下旬、茨城県つくば市では市内最大規模の夏まつり「まつりつくば」が開催される。ねぶたパレードや万灯神輿、ステージイベント、約 400 の出店など、多彩な催しを目的に、例年約 40 万人以上 が訪れるという街の一大行事である。このまつりの名称を初めて耳にしたとき、多くの人がどこか違和感を覚えるのではないだろうか。「つくばまつり」でも「まつりinつくば」でもなく、「まつりつくば」。地名と名詞をただ置いただけのようでもあるが、語感がどこか落ち着かない。この違和感は単なる印象ではなく、日本語の語形成に関する「形態論」の観点から説明することができる。

「まつりつくば」は、「まつり」と「つくば」という 2 つの名詞が結合してできた複合語である。これは、複数の語を組み合わせて新しい語を作るしぐみを指す「複合」によって生じた語の具体的な例である。日本語には「入学式（「入学」＋「式」）」「映画館（「映画」＋「館」）」「料理本（「料理」＋「本」）」など、名詞同士の複合語が数多く存在する。英語でも同様で、例えば「snowman（雪だるま）」は「snow」と「man」の複合語である。ただし、snow と man はただ並列的に並んでいるわけではない。意味的観点から見ると、snowman は snow のことではなく、「snow で作られた man」を指す語である。語全体の範疇や意味を決める要素を「主要部（head）」というが、このことからsnowmanの主要部は、右側に

ある「man」であることがわかる。snowman の場合に主要部が 右側の man にあるように、日本語、英語を問わず、複合語では主要部が右側に位置するという強い傾向がみられる。例えば、「駅前」と「広場」を複合させた「駅前広場」では、左側の「駅前」は右側の「広場」という空間を説明するために置かれた要素であり、語全体の中心は右側の要素である「広場」である。「京都駅」、「入試問題」、「学園祭」なども同様で、最後の語が語全体の意味のカテゴリーを決めている。つまり、複合語の右側には「これが何であるか」を示す語が来るのである。このような複合語の意味の中心となる要素が右側に置かれる傾向を「右側主要部の原則」と呼ぶ。この傾向は日英語だけでなく、デンマーク語やオランダ語などゲルマン諸語にも広く見られる特徴だと指摘されている。

ここで「まつりつくば」の場合を考えてみよう。右側に置かれている「つくば」は地名であり、語全体が指すものは「つくばという地域」であるはずである。しかし、実際の「まつりつくば」は、「つくばで行われる祭り」というイベントを指す。そのため、本来なら主要部になるべきは、左側の「まつり」であるはずだ。つまり、「まつりつくば」は、複合語の右側主要部の原則に則ると「Xまつり」とするのが適切であるにもかかわらず、それを逆転させているのである。そのため、私たちは無意識のうちに構造的な違和感を覚えるのである。形態論の観点から見ると、「まつりつくば」は右側主要部の原則に反した、少し特殊な語形成であるといえる。

では、なぜあえてこの地名である「つくば」を主要部とする名称が選ばれたのだろうか。公式サイトによると、まつりつくばは「市民とともにつくる、つくばの夏の風物詩」として位置づけられ、地域のにぎわいを生み出すイベントとして長く親しまれてきた。ねぶたパレードや山車が街を巡り、夜にはライトアップされた巨大な造形物が道路を進む。浴衣姿の来場者が行列を作り、駅前通りには露店がずらりと並ぶ。まつりの空気が街そのものを包み込み、「つくばの街がまつりになる」ような時間が広がる。その一体感こそが、このまつりが目指す姿である。

この点を踏まえると、右側主要部の原則に則った「つくばまつり」という名称では、このイベントの魅力を伝えるには不十分であると考えられる。なぜならば、右側主要部の原則に則った語順では、単に「つくばで開かれるまつり」という説明的な印象が強くなるからである。一方、「まつりつくば」と形態素の並びを入れ替えることで、街が主体となってまつりに染まっていくイメージが想

起される。言い換えれば、この名称は「つくばで開催されるまつり」ではなく、「まつりで輝くつくば」という感覚を打ち出すネーミングになっているのだ。

この他にも、近年の地域イベントにおいて、あえて「〇〇+まつり」という形式を取らず、耳に残る名称をつくる例は珍しくない。「よさこいソーラン」や「すすきのアイスワールド」のように、語形成の規則から見れば少し特異であっても、語のリズムや勢いを優先して名づけられることがある。「地名+まつり」という凡庸な形式では埋没してしまう可能性がある中で、「まつりつくば」は一度聞いたら忘れにくい語感を持ち、看板やポスターにも視覚的なインパクトを与える。右側主要部の原則に反する語形成であるからこそ、記憶に残りやすいともいえる。

もちろん、言語の規則だけで名称を説明することはできない。ことばには、文化、アイデンティティ、地域の誇りといった要素が深く結びついている。つくば市は研究学園都市として発展し、多様な人々が集まる街でもある。全国から観光客や留学生が訪れる中で、まつりの名称が「つくば」という地名を強く押し出しつつ、固定的な語順の枠を超えた表現を採用したのは、地域の個性を象徴する選択とも解釈できる。「正しい語順」よりも、「まつりの中でつくばが輝く」というメッセージ性を優先したとも考えられる。

つまり、「まつりつくば」という語は、言語学的には規則からはずれた複合語でありながら、だからこそ特別な響きを獲得した名称なのである。私たちが抱く違和感は、ことばのルールを知っているからこそ生まれる自然な感覚である。しかし、その違和感は、街の空気、まつりの熱気、人々の記憶と結びついたとき、むしろ魅力として受け取られる。右側主要部の原則という学術的な視点を通してみれば、一見おかしな語が、実は地域の戦略や文化の意図を映し出していることがわかる。そして、まつり当日、提灯の明かりと歓声に包まれながら「まつりつくば」という名称を思い出したとき、その言葉は単なる名詞ではなく、街が一体となって踊り出す瞬間そのものを象徴する言葉として響いてくるだろう。

〈参考文献〉
「まつりつくば 公式サイト」<https://www.matsuri-tsukuba.com/>
(2025年11月閲覧)

(中山果乃)

chill time

タワラ語の世界

	単純形	重複形	日本語訳
①	am	amam	食べる
②	apuya	apapuya	料理する
③	geleta	gelegeleta	到着する
④	hopu	hopuhopu	下に降りる
⑤	tou	tutou	泣く
⑥	totogo	tootogo	病気になる
⑦	uma	?	飲む
⑧	tete	?	(橋を)渡る

法則を読み取って？に当てはまる単語を考えてみよう

タワラ語とは、パプアニューギニアのミルン湾州の集落などで約 2 万人の話者を持つ言語であり、台湾から東南アジア島嶼部、太平洋の島々、マダガスカルに広がるオーストロネシア語族のオセアニア語派に属す。タワラ語の特徴としては、動詞の構成音の一部を反復させることで動詞が表す動作の継続や持続を表す「重複形」という現象が存在するという点が挙げられる。今回の問題では、この重複形の規則を読み解くことが求められる。

この重複形を読み解くには、語をまとまりの単位である音節に分けて考えることがカギとなる。タワラ語の重複形には、大きくわけて 4 つのパターンが存在する。

パターン①は、動詞の語頭が「母音＋子音」で始まっているものであり、例題では①「am」や②「apuya」がこれに該当する。この場合、1 音節目の母音と子音を反復させることで重複形が作られる。そのため、例題①では、「am」＋「am」→「amam」、例題②では「apuya」＋「ap」→「apapuya」という重複形ができる。

パターン②は、語頭が、異なる「子音＋母音」の組み合わせで始まっているものであり、例題では③「geleta」や④「hopu」がこれに該当する。この場合、1 音節目と 2 音節目をそのまま反復させることで重複形を作る。そのため、例題③では、「geleta」＋「gele」→「gelegeleta」、例題④では「hopu」＋「hopu」→「hopuhopu」という重複形ができる。

パターン③は、語頭が「子音＋二重母音」で始まっているものであり、例題では⑤「tou」がこれに該当する。この場合、1 音節目の子音と二重母音の 2 つ目の母音を反復させることで重複形を作る。そのため、例題⑤では、「tou」＋「tu」→「tutou」という重複形ができる。

パターン④は、語頭で同一の「子音＋母音」の音節が繰り返されているものであり、例題では⑥「totogo」がこれに該当する。この場合、1 音節目の母音を伸ばすことで重複形を作る。そのため、例題⑥では、「totogo」＋「o」→「tootogo」という重複形ができる。

(市川莉玖)



編集委員からのお願い

皆さまのご意見・ご感想をお寄せください

2025年9月から創刊された“The LinguistIC”。本紙をご購読いただいた感想をお聞かせください。創刊間もないこともあり、まだまだ至らない点も多いかと思います。皆様から頂戴したご意見やご感想は、今後の編集・執筆活動に反映させていただきます。ぜひ忌憚のないご意見をいただきたく存じます。

ご質問およびご意見・ご感想は、「【The LinguistIC】質問・感想フォーム」で合わせて受け付けております。以下のリンクからフォームに入って、ご回答ください。

<https://forms.office.com/r/z4XfSBAWH8>



形態論特集^{#2}

「映え」の歴史



近年、「映[ば]え」という語をよく耳にする。写真を撮影する際、背景や構図、配置、光の具合等写りの良さに配慮するだろう。この写りの良さのことを「映[ば]え」と表現する。漢字からわかるとおり、「映[ば]え」という語は「映[は]える」という動詞に由来する。ここでは、この「映[ば]え」という語がどのようにしてできたのかをみていくことにする。

三省堂『現代新国語辞典 第七版』の「ばえる（映える）」の項目の説明によると、「映[ば]え（る）」は「インスタ映え」という語から来ている。「インスタ映え」という語は、写真・動画投稿アプリ「Instagram」で発生した語である。見栄えがよく「映える」ことを指す「インスタ映え」が、2017年に「ユーキャン新語・流行語大賞」の大賞を獲得した。まず、この「インスタ映え」という語がどのようにできたのかみていこう。

○「映[は]える」から「インスタ映え」へ

「インスタ映え」とは、「インスタ」と「映[は]える」という2つの語が合わさってできた語である。

まずこの「インスタ」は、英語のアプリ名“Instagram”を日本語に取り入れる際にカタカナ表記に直した「インスタグラム」が元となっている。このように、他言語の語が別の言語の語彙に組み入れられる現象を「借用」と呼ぶ。そして、この「インスタグラム」の最後の部分が抜け落ちることで「インスタ」となった。このように語の一部が抜け落ちることを「短縮」という。どの部分がどのように短縮されるかによっていくつか種類があるが、「インスタ」の場合、語の最後の部分が抜け落ちているため「後部短縮」という。つまり、借用の際にカタカナ表記に直され、さらに後部短縮が起こることで「インスタ」という語が誕生したのである。

形態論特集^{#3}

カニほぼガニ説から 見る日本語の不思議



独自の説を検証するバラエティ番組「水曜日のダウンタウン」で、「カニほぼガニと呼ばれている説」という説が放送された。これは、毛ガニ、タカアシガニ、ズワイガニ…のように、「カニ」の種類を指す名前では「カニ」は用いられずに、その代わりに「ガニ」が用いられているという説である。確かに、カニの名前を思い返すと「○○ガニ」と濁るものばかりだ。この説に対し、番組内で専門家は「日本にはカニが1255種類もリストに載っているが、○○カニのように濁らないで呼ばれるカニは1種類もない。」と番組内で発言した。「カニ」という生き物のはずなのに、名前になると「○○ガニ」と濁るのはなぜだろうか。この不思議を、形態論の視点から考えてみよう。

まず、「ズワイガニ」や「タカアシガニ」のような「○○ガニ」という名前は、複数の語が組み合わさってできた複合語だ（今号「まっつくば」を参照）。「ズワイガニ」の場合、「ズワイ」＋「カニ」という二つの自由形態素からできている。「ズワイ」とは、古語で「細長い木の枝」や「細いもの」を意味する「楚(すわえ)」が転訛した語で、その細長い脚の形からこの名前がついたといわれている。

では、なぜ「ズワイガニ」のように“ガニ”と濁るのだろうか。その鍵となるのが、日本語の特徴的な音韻現象である連濁（れんだく）である。連濁とは、複合語を作るときに、複合した後ろの語の最初の音が濁る(有声化する)現象のことだ。たとえば「手(て)＋紙(かみ)」で「てがみ」、「たぬき＋しる」で「たぬきじる」のように、語を組み合わせたとき、後半部分が濁音になる。「カニ」という語が他の語と複合するときに「ガニ」になるのも、この連濁が起きているからだと考えられる。

しかし一方で、後ろの語が濁らない場合もある。連濁はどんな複合語にも必ず起こるわけではなく、いくつかの条件によって起こったり起こらなかったりするのだ。その代表的な条件のひとつが、「ライマンの法則」である。これは、後ろの語にすでに濁音が含まれている場合、連濁が起こらないという法則だ。例えば、「たぬき」＋「そば」の場合、「たぬきそば」になる。「そば」の「ば」にはすでに濁音が含まれているため、「たぬきそば」にはならない。「○○ガニ」においては、元々の自由形態素である「カニ」には濁音が含まれていない。つまり、ライマンの法則によって連濁が妨げられる理由は無いため、「○○ガニ」となるといえるのである。

一方、「映[は]える」は、「周囲との調和や対比によって、あざやかに見える。引き立つ」という意味を持つ動詞である（旺文社『国語辞典』第十二版）。これら2つが合わさることにより「インスタ映え」という語ができているが、ここでは「複合」と「逆成」という2つの語形成が介入している。

複合とは、2つ以上の自由形態素（単体で語となりうる形態素）を組み合わせて新しい語を作る語形成である。たとえば、「日本経済」「紫色」といった語が複合の例である。これらの語は、「日本」と「経済」、「紫」と「色」という自由形態素をそれぞれ組み合わせることで生まれた語である。このように、複合によって作られる語を「複合語」と呼び、「インスタ映え」は「インスタ」と「映[は]える」が複合してできた複合語である。

さらに、この複合の過程で、「映[は]える」という動詞から「映[ば]え」という名詞への変化が起こっている。これは「逆成(back-formation)」と呼ばれる現象であり、語の一部が抜け落ちることで別の語へと変わっている。例えば、英語の「typewrite（タイプライターを打つ）」や日本語の「たそがれ」という動詞は逆成によってできた語である。英語にはtypewriter（タイプライター）という名詞と、typewriteという動詞がある。動詞に-erを付けて名詞を作るのが一般的な派生であるが、これは逆の派生過程を経ている。もともと「typewriter」という名詞が存在し、これから派生形態素である-erが抜け落ちることで動詞「typewrite」ができたのである。「たそがれる」に関しても同様である。「たそがれる」という動詞が先に存在し、接尾辞の「る」が抜け落ちたことで名詞の「たそがれ」ができたのである。

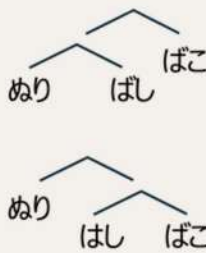
なお、音の面に注目すると、複合の元となる「映[は]える」の語頭の音は濁らないにもかかわらず、「インスタ映え」になると、「は」から「ば」へと濁っている。これは、「連濁」と呼ばれる、複合の際に後半部分の語頭の第一音が濁音(有声音)になるという現象が起こるためである（詳細は今号の「カニほぼガニ説」を参照のこと）。

ここで注目すべきは、「映える」から「映[は]え」という名詞への逆成が起こってから複合が起こっているわけではないという点である。なぜなら、日本語には「映[は]え」という語は存在しないからである。このことから、逆成により「映[は]える」から「映[は]え」が作られ、これが「インスタ」と複合したとは考えられない。「映[は]え」が存在しないにもかかわらず、複合語でのみ「○○映[ば]え」が存在するということは、複合と逆成が同時に起こってい

また、和語で並列構造（2つの語の関係が対等なもの）を作る場合も連濁しないことが多い。例えば、「好き（すき）」＋「嫌い（きらい）」→「好き嫌い（すききらい）」、「山（やま）」＋「川（かわ）」→「山川（やまかわ）」、「飲み（のみ）」＋「食い（くい）」→「飲み食い（のみくい）」などがこれに該当する。このように、どちらの和語も対等な関係にあるとき、濁りは起こらない。

次に関係してくるのが、右枝条件である。右枝条件とは、複合語の第2要素が右側（右枝）に位置する場合、連濁が起こるという法則である。例えば、「漆塗りの」「簀」を入れる「箱」を想起してみよう。仮にこれに名前をつけるのであれば、「塗り簀箱」となるだろう。ただし、この語の読みは「ぬりばしばこ」と「ぬりはしばこ」の2種類が可能であり、それぞれ異なる容器を指すことが、日本語の母語話者には直観的にわかる。おそらく読者も、「ぬりばしばこ」は「「漆塗りの簀」の箱」であるのに対し、「ぬりはしばこ」は「漆塗りの「簀を入れる箱」」であると判断されるのではないだろうか。では、我々はどのような知識に基づいてこのような判断をしているのだろうか。

まず、「ぬりばしばこ」について考えてみよう。これは、「ぬり」＋「ばし」＋「ばこ」という3語からなる複合語であるが、2語目が「はし」から「ばし」へと連濁が起こっている。複合語の第2要素で連濁が起こるとする右枝条件と照らし合わせると、この事実は「ばし」が複合語の第2要素であることを示している。つまり、この連濁から「「ぬり」＋「はし」→「ぬりばし」という複合が起きていることがわかる。この「ぬりばし」と「はこ」の複合によって「ぬりばしばこ」ができるため、この語が「漆塗りの簀」を入れるための箱であると判断できるわけである。



一方、「ぬりはしばこ」では、「はし」には連濁が生じていない。このことから、「はし」が複合語の第2要素ではないことがわかる。真ん中の語である「はし」が第2要素とならないためには、「はし」を第1要素とする「「はし」＋「はこ」→「はしばこ」」が先に作られ、さらにこれを「ぬり」に続けて「「ぬり」＋「はしばこ」→「ぬりはしばこ」とするしかない。ちなみに、この場合でも「はしばこ」が複合語の第2要素となるが、すでに濁音を含んでいるために、ライマンの法則から連濁が生じず、「ぬりはしばこ」となる。

ると考えるべきである。同様の過程によってできる複合語として「化粧映え」や「夕日映え」などが挙げられる。

○「インスタ映え」から「映[ば]え」へ

このようにしてできた「インスタ映え」から、最後「インスタ」が抜け落ちるわけだが、ここでは「前部短縮」が起きている。このとき、複合語から単一の語に戻ることになるわけだが、複合によって連濁していた「映[ば]え」の部分が、そのまま残ることで「映[ば]え」となったのである。

○「映え」から「映える」へ

「映[ば]え」はさらに、「三省堂 辞書を編む人が選ぶ今年の新語2018」に選ばれた「映[ば]える」に変化することになる。「映[ば]え」から「映[ば]える」への変化は、「転換(conversion)」という語形成によるものである。これは、ある語が語形を変化させることなく、別の品詞へと変わることで別の語に変わる語形成である。転換の例として、英語の「walk」がある。英語では、動詞「walk（歩く）」から名詞「walk（歩き）」へと、語形を変えることなく品詞が変化する。ちなみに、日本語では「歩く」から「歩き」のように、転換により語形変化が生じる。「映[ば]える」につく「る」は、名詞から動詞へ転換に伴う語形変化である。

以上、「映[ば]え（る）」という新語ができるまでの過程を述べてきた。「映[は]える」と「映[ば]える」の間には単なる濁点の有無の違いしかみられないが、単に濁点がついた（有声化した）だけではなく、Instagramの借用→短縮、「映[は]える」との複合&逆成→短縮→転換という長い経緯を経て「映[は]える」から「映[ば]える」へと至ったのである。

〈参考文献〉
三省堂「辞書を編む人が選ぶ今年の新語2018」（閲覧日：2025.12.02）
<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/topic/shingo2018/>

旺文社『国語辞典』第十二版。
三省堂『現代新国語辞典』第七版。
(植木綾那)

この右枝条件を念頭に置いて、カニの種類を考えてみよう。すると、「ズワイガニ」や「毛ガニ」の場合、「ズワイ」、「毛」といった前半の要素が第1要素となり、「カニ」が第2要素となる。そのため、「カニ」の部分で連濁が起こり、「ガニ」となるのである。また、「タカアシガニ」の場合も、高い足を持ったカニであるわけなので、「タカアシ」が第1要素であり、「カニ」が第2要素となる。このため、右枝条件から「タカアシガニ」と連濁が起こるのである。

ここまでをまとめると、「○○ガニ」と濁る理由は、①複合による連濁が起きている、②ライマンの法則では妨げられない、③並列構造ではない、④右枝条件によって「カニ」が連濁の起きる位置にある、という四つの要素が揃っていて、構造的にも音韻的にも「カニ」が常に連濁しやすい位置に置かれているためだと考えられる。こうして見ると、「カニほぼガニ説」は、ただのバラエティのネタではなく、意外と理にかなった言語学的な説だったことがわかる。「カニ」という語の裏には、音の規則と構造の深い仕組みが隠されているのだ。さらに、普段何気なく使っていることばにも、このような規則性が存在することに気づくと、日本語の奥深さを改めて感じられる。身近な疑問からでも、言語の仕組みを読み解くことで新たな発見が得られるのである。

(渡邊来羽)

chill time の答えと解説

chill time の答え

⑦umuma ⑧teete

⑦の「uma」は、語頭が「母音＋子音」で始まっており、これはパターン①に該当する。パターン①は1音節目の母音と子音を反復させることで重複形が作られるため、1音節目の母音「u」と2音節目の子音「m」を反復させて、「umuma」という重複形ができる。

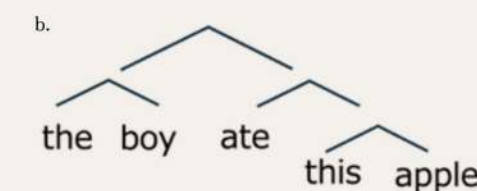
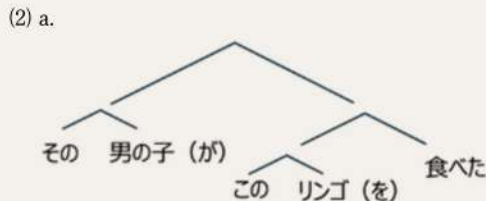
一方、⑧の「tete」は、同一の「子音＋母音」である「te」の反復が語頭であり（かつそれのみで構成されており）、これはパターン④に該当する。パターン④は1音節目の母音を伸ばすことで重複形を作られるため、1音節目の母音「e」を伸ばし、「teete」という重複形ができる。

連載第2回のトピックとして、英語と日本語の基本語順について取り上げる。日本語の語順がSOVであるのに対して、英語の基本語順はSVOである。次の文をみていこう。

- (1) a. その男の子がこのリンゴを食べた。
b. The boy ate this apple.

(1a)の文は、主語が「その男の子」、目的語が「このリンゴ」、動詞が「食べた」であり、これらが主語(S)、目的語(O)、動詞(V)の順番で並んでできている。一方、(1b)の文は、主語が「the boy」、動詞が「ate」、目的語が「this apple」であり、これらがSVOの順番で並んでできている。

前回の記事では、文というのは文を構成する語句がただ線的に並んでいるのではなく、隣接関係にある語句同士が「構成素(constituent)」というかたまりを成し、それらが階層的な構造を形成してできていることを述べた。(1a, b)の文の構造を樹形図によって示すと以下のようになる。



(2)に示すように、(1)の文は、ただ語が線的に並んでいるのではなく、構成素同士が結びついてより大きな構成素を形成することで、階層的な構造を成してできている。

ここで、それぞれのカテゴリーについて注目しよう。最下位層である各語は、統語的なカテゴリーが異なる。例えば、「その」という指示形容詞は統語的には「決定詞(determiner)」と呼ばれるカテゴリーに属すのに対し、「男の子」という語は「名詞(noun)」というカテゴリーに属する。このようなカテゴリーを「統語範疇(syntactic category)」と呼ぶ。(1a, b)の統語範疇をまとめると、次のようになる。

- (3) a. [その] 決定詞 (D)
[男の子 (が)] 名詞 (N)
[この] 決定詞 (D)
[リンゴ (を)] 名詞 (N)
[食べた] 動詞 (V)
- b. [the] determiner (D)
[boy] noun (N)
[ate] verb (V)
[this] determiner (D)
[apple] noun (N)

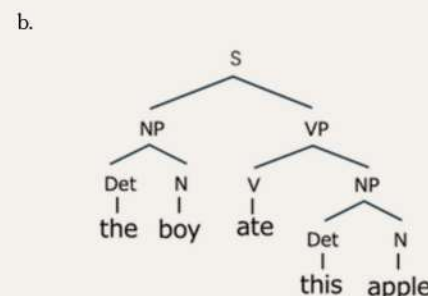
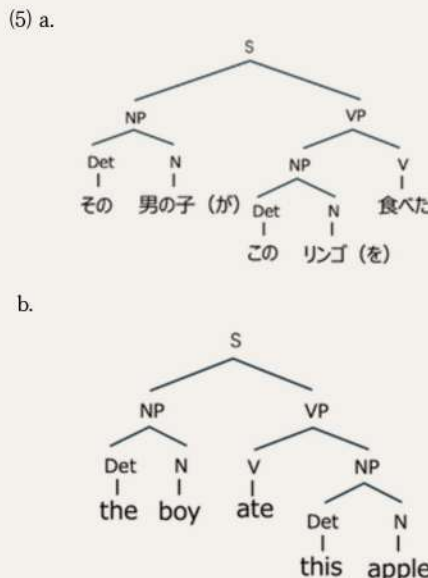
さらに、これらの語を含む構成素の統語範疇に注目してみよう。例えば、[D この]と[N 男の子 (が)]による構成素「この男の子」は、「この」という指示的表現ではなく、「男の子」のことを指す構成素である。このことから、この構成素は「男の子 (が)」が中心的要素であることがわかる。このように、複数の構成素からなる構成素の統語範疇は、中心となる構成素の統語範疇に句(phrase)をつけて、名詞句(noun phrase: NP)のように表現することにする。すると、(1)の文の(3)より上位の構成素の統語範疇は、以下のよう示される。

- (4) a. [その男の子 (が)] 名詞句 (NP)
[このリンゴ (を)] 名詞句 (NP)
[このリンゴを食べた] 動詞句 (VP)

- b. [the boy] noun phrase (NP)
[this apple] noun phrase (NP)
[ate this apple] verb phrase (VP)

なお、最大となる構成素は文全体となるため、最上位の階層の統語範疇は「文(sentence: S)」とする。

これらの統語範疇を(2)の樹形図に加えると、以下のよう示すことができる。



構成素構造に統語範疇の情報を加えた構造を「句構造(phrase structure)」と呼ぶ。句構造には、以下の語順に関する規則がみられる。(6)に示すように、(5)の句構造と異なる語順をとる文は文法的となる。なお、「* (アスタリスク)」は、その文が文法的に誤っており、文として成立しない文であることを示す。

- (6) a. *[[男の子 その (が)] [[リンゴ この (を)] 食べた]]
b. ??[[その 男の子 (が)] [食べた [この リンゴ (を)]]]
c. [[その 男の子 (が)] [[この リンゴ (を)] 食べた]]

- (7) a. *[[Boy the] [ate [apple this]]].
b. *[[The boy] [[this apple] ate]].
c. [[The boy] [[ate] [this apple]]].

この語順に関する規則は、どのように決まるのだろうか。Chomsky (1957)は、個々の言語の句構造は「句構造規則(phrase structure rules)」という規則によって派生し、上記のような語順に関する規則は句構造規則の帰結として得られると主張した。句構造規則とは、記号の書き換え規則であり、「S (文)」という記号をスタートとして、記号を書き換えていくことで句構造ができあがる。日本語と英語の句構造規則の一部を(8)に示す。

- (8) a. 日本語の句構造規則
S→NP VP
NP→Det N
VP→NP V
- b. 英語の句構造規則
S→NP
NP→Det N
VP→V NP

(8a)は日本語の句構造規則である。まず、記号「S」は「NP VP」という記号配列に書き換えられる。さらに、記号「NP」は「Det N」という記号配列に、一方、記号「VP」は「V NP」という記号配列に書き換えられる。その結果として、(5a)に示す句構造ができあがるのである。また、(8b)は英語の句構造規則であり、これらを適用していった結果、(5b)の句構造ができあがる。

ここで、(8a, b)を比較すると、日本語と英語の句構造規則では、VPが鏡像関係にあることがわかる。つまり、「VP」の書き換えが「NP V」と「V NP」で逆転しているのである。この「VP」は動詞句であり、その中の「NP」は基本語順を構成する目的語(O)である。すると、このVP内の構成要素である「V」と「NP」が逆転するということが、結果として日英語の基本語順の違いを生んでいるといえる。

(平子快希)

ご質問をお寄せください

日頃の生活や学習で疑問に思っていることや、悩んでいることはありませんか。皆さんが抱えていることばに関する疑問や悩みを“**The LinguistIC**”編集委員が解決します。お寄せいただいた質問は、本紙で取り上げて回答させていただきます。素朴な質問でも問題ありません。ことばに関して不思議に思っていることや、困っていることがあればなんでもご質問ください。

ご質問は、「**【The LinguistIC】質問・感想フォーム**」で合わせて受け付けております。右のリンクからフォームに入って、ご回答ください。



Instagramを開設しました

この度、**The LinguistIC**に関する情報を発信するためのInstagramを開設しました。刊行の案内や作成風景などを発信していく予定ですので、ぜひフォローをお願いします。

右のリンクから入れます→



The LinguistIC 第2号

発行日 2026年1月15日
発行者 現代英語学科 三輪健太ゼミ
監修 三輪健太
記事執筆者 7名
レイアウト 市川莉玖

*本紙は、茨城キリスト教大学2025年度「学生団体企画奨励金」の助成を受けて刊行しています。

※オンラインからでもご講読いただけます。右のリンクからダウンロードしてください。

最新刊はコチラから バックナンバーはコチラから



現代英語学科三輪ゼミ開発 英文法用語検索アプリ

IC生限定



chocoGRA

英語学習時のおともに

わからない英文法用語をササッと検索



先生やテキストの解説がわからない。それは英文法用語の理解不足が原因かもしれません。そんな時、スマホでササッと用語を検索して、英語学習の効率を高めましょう。

アプリ登録の際は、以下のリンクからインストールしてください。インストールの際に、スマホのほむ画面に保存すれば、いつでもどこでも知りたい用語が検索できるようになります。

<https://kenta-miwas-team.adalo.com/social-media-app>

